

日本語組版の歴史（抜粋1）

江戸期の書物というのは、基本的には、二種類のまったく別のジャンルに分かれています。一つは武士・僧侶系などの知識階級の読む書物、これは漢籍を典型とする所謂「物の本」ですが、漢字が極めて多いし、書体は楷書が主体で、字間が空けて組まれていることが多い。もう一つは庶民・町民が読むものでして典型的には草双紙などの通俗書、草双紙というのは本文がほとんど仮名で出来ていまして、漢字がほとんどない。漢字がたまに出てきましたが、それには振り仮名がふってありますし、かなり絵が多い。書物というメディアの享受・鑑賞の構造を考えると、大抵の場合、挿し絵からテキストが「自立」して存在しているわけではありません。武士系・僧侶系のものとは完全にスタイルが違う。庶民系のもので楷書を遣つてあるのは珍しく、漢字は行書・草書主体でありまして、更にうねうねとした連綿仮名を主体とします。仮名遣いも相当に奔放かつ表音的でありまして、仮名遣い方式というのも当然確立されていない。

府川充男「日本語組版の歴史」『日本語の文字と組版を考える会 会報』第九号、一九九八年六月

2

先駆者たち

落合芳幾

一八三三―一九〇四

福地源一郎（桜痴）

一八四一―一九〇六

宮武外骨

一八六七―一九五五

木版から活版へ

明治五年二月二十一日、「東京日日新聞」創刊号が発行されたが、創刊号は木版刷りだった。

ようやく借りものの活字活版機械を入手したが、活字が不足しているので、二号からしばらくは、鉛活字に木活字も使用して発行をつづけた。しかし、なおも活字不足の状態であるために、漢字、平仮名、片仮名を不ぞろいに並べるようになって読みにくくて、〈新聞漢文（ちんぷんかんぶん）〉などと嘲笑されるにおよんで、十号になると、ふたたび木版刷りに戻ってしまい、二十号は木活字、二十一号からは、木活字、彫字まじり、二十七号は全部木活字というように、印刷上の苦勞は、並大抵のことではなかった。

興津要『明治新聞事始め』大修館書店、一九九七年

4

目次 810.2/NIH/8 0120877C

目次 810.2/NIH/7 0120876E

目次 810.2/NIH/5 0120875G

目次 810.2/NIH/4 0120873A

目次 810.2/NIH/3 0120872B

目次 810.2/NIH/1 0120870F

目次 810.2/NIH/2 0120871D

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870F

目次「活字」／「国民国家」の漢語・活字

目次 810.2/NIH/1 0120870F

KDU 総研 雑誌 http://www.linelabo.com/KDU/

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

目次 810.2/NIH/1 0120870E

9

5

府川充男「日本語組版の歴史」『日本語の文字と組版を考える会 会報』第九号、一九九八年六月

目次 810.2/NIH/1 0120870E

9